

わけにいかないので三食とも水に米粒が少量浮いているような「おもゆ」で茶わん一杯ぐらいの量でした。食事に要する時間は一分以内、それもそのはず、箸も要らない、すすり込むだけの食事でした。食べ始めるまでが楽しみで、食べ終わればがっかり、こんな日が毎日でした。しかもノルマに追われる重労働で体がもつはずがありません。

半年ほど過ぎてからの主食は黒パンでした。一食三百グラムですが水分が多く、これに塩鮭の入った味の薄いスープ、時にはうまくない乾燥トマトのスープもありました。パンを各人に配分するのが大変でした。れんがの二倍ぐらいの大きさの黒パンを八等分したのが一人分です。正確なばかりなどあるはずもないので、目分量で配分するのですが、衆人注目の中での配分は大変気を使うことでした。三度三度の食事ごとにパンは抽選によって公平に配分されました。

時には、道路凍結のため食糧が届かず、絶食の日もありました。一週間も小豆の塩せんざいばかり食べたときもありました。

このような食事・厳寒・重労働と栄養失調で数万の同胞が帰国もできず、酷寒のシベリアの地で亡くなっていました。

しかし、昭和二十三年十二月三日、四年ぶりに希望の舞鶴に上陸し、懐かしい祖国に帰ることができました。

シベリア抑留記

福岡県 林 茂 美

敗戦から入ッ

朝鮮咸興で敗戦した私たちは、すべてソ連軍の指令のもとでしか行動ができなくなった。北朝鮮をあちこち移動したあけく、興南で幕舎生活が始まり、すべてソ連軍が銃を肩にかけ監視した。

直ちに私たちは興南港にある倉庫の整理、荷積み作業が課せられた。十一月ころになると私たちの中にビタミン欠乏症による脚気、壊血病等が出始めた。昭和二十年十二月下旬、第二十一大隊（杉本大尉）千人が編成され、

急に乗船命令が出された。

四キロぐらい行軍し、乗船は日暮れになった。ところが私の担いでいた行李を、ソ連兵十三人くらいが横から来て、アツという間に盗んで港の方に逃げたので、直ちに後を追ったが、彼等が拳銃を発射し威嚇するので断念した。行李の中には通帳、写真、医薬器具その他の貴重品を入れていたので、出ばなをくじかれてしまった。

私たちが乗せられた船は古い油送船で、千人がすし詰め、身動きできないありさまだった。洗面はできず、食事は二食、大小便は、甲板に上る出口に立っているソ連兵の歩哨の許可を受けてでないと行けない。甲板の上は身を切るような潮風が吹き上げてくる。油送船の前には砕氷船が通って、氷を割りながら私たちの船は走っている。恐らく零下三十度以下になっているだろう。

大小便は、デッキにつかまりするのだが、手を放そうものなら、何十メートル下の海水に落ち、命は消えてしまうのである。ソ連に上陸するまで何人かの同僚が死亡して水葬された。興南港を出て二週間以上たって、ソ連領のソフガ湾に上陸し、日本に帰国するつもりで乗船し

た私たちの望みはついにたち切られ、ソ連に強制連行されたのである。

十日くらい古い倉庫に押し込められたが、夜半出發命令が出たのが一月中旬、一番寒いときである。三昼夜重い背のうを背負い、その上防寒具をつけて凍った川の上を行軍するのである。自分の体か人の体かわからないほどしびれ、寒さと空腹でバタバタと氷や積雪の上に倒れる者が出たが、銃を肩にかけたソ連兵は、ダバイ、ダバイと銃床でたたくのである。でも、歯をくいしばり、故郷の父母や妻のことを思うと、倒れることはできなかった。

伐採作業

疲れ果てて、やっとチパリという人家が五、六戸しかない山の中に着いた。急造の丸太を積んだバラック建てで、四方には望楼があり、歩哨が立ち、鉄条網が二重に張りめぐらされ、「ここから出ると射殺する」と書いてある。作業は伐採で、直径五、六十センチ以上もあるエゾ松を二人鋸で伐採し、枝打ちまでしなければならぬが、ノルマが高く、五〇%もできない。食事は黒パン三

百六十グラムとスープかけごうに一杯、ひどいときは大豆が五、六粒しか入っていないときが多かった。

作業は一組二十五人に編成され、毎日ソ連の点呼を受けたのち、ソ連のマッセルに渡され、二人のソ連兵士に警戒されながら、重たい防寒具を身につけた私たちは、六キロ以上もある積雪の山を登るのであるが、途中、ソ連の警戒兵からダバイ、ダバイと押される。ヨロヨロして倒れるほどに体力も気力もない。昼食のパンは朝大抵の人は食べているので、雪を食べる人が多い状況である。

寒さと重労働、それに飢餓は重なり合って、栄養失調、それに夜盲症が続出した。便所に行くとき血便でいっぱいである。なれない伐採作業で負傷者が多く、あるときは八人の同僚が大木の下敷きになって死んでいった。

医務室にはいつも二、三人の死体が衣服をはぎとられて冷たく凍っていた。毎日二十人一組が死体の穴掘りに出ていったが、一日五十センチも掘れず、死体には雪をかぶせ、結局雪解けの五、六月には動物や鳥のえさになったものと思われる。

髪やひげは伸び放題で、入浴は月一回、いいときで二回、それも洗面器二杯が一人分、電灯はなく、夜は松の木でたくストープと松やにをたいて電灯のかわりとした。顔は真っ黒で、まるで人間の姿ではない。

強制労働で夜は早く寝たいが、夕方五時のソ連側の人員点呼には全員凍った外で人員を調べるが、人員が合わず、二時間も立たされる。それが終わると夕食と明日のパン配分で、毎日十二時ごろに丸太でつくった床につくが、南京虫やシラミの襲撃でとても眠れるものではない。

反軍闘争

昭和二十三年には私も三級に体力が落ちて、他の収容所を転々と回され、砂糖工場、パン工場、ウォッカ工場、農場、魚工場、道路工事に服したが、ノルマが高いのは同じだった。

このころからハバロフスクから日本新聞が発刊され、祖国日本が知りたい、何か読みたい気持ちでいっぱいだった私たちは皆飛びついて読んだ。これと前後して、ソ連側の調査と、民主運動が始まり、スターリン讃歌と

ともに上級者に対するつるし上げが猛烈な勢いで始まり、私は衛生部だったので、北京七二部隊の細菌製造、研究細菌戦について調査が続いた。日本人の中には軍民含めての民主運動として盛り上り、反ファシスト委員会ができ、五人の委員が選挙により決定され、これは帰国するまで続いた。

私は第五十九師団の昭和十九年秋に行われたコレラ作戦についての内容について追求を受けた。第五十九師団がコレラ菌を黄河付近に散布したのではないか。このことについて私は、師団防疫班は師団兵員とその周辺の予防、防疫が主任務であり、私はその業務についてきたのであり、コレラ散布の事実第五十九師団にはないことを一貫して言い続けてきた。

中華人民共和国への移管

昭和二十四年ころから給与も少しずつよくなり、ノルマも遂行できるようになった。同僚は次々帰国して、残留者だけがいか所集結させられ、いつ帰国できるものか全く不明だった。昭和二十五年七月十四日、ソ連政治部少佐は、私たち全員に対し「君たちは明日いよいよこ

のラーゲルを出発することになった。君たちの行き先ではルーブルは使用できないから、手持ちの金は本日中に使ってしまった」と指示され、何と菌切れの悪い不安さでいっぱいだった。

翌七月十五日、私たち九百七十一人はハバロフスクをあとに、鉄条網の張つてある貨車に詰め込まれた。ソ連兵の警戒のもとに、外は全然見せず、緩急河に到着し、中共軍に引き渡された。中国の列車は客車で、きれいさっぱりして窓にだけ紙が張つてあり、給与も白パンとコーリャンめしで腹いっぱい食べさせてくれた。

やがて私たちは撫順戦犯管理所に収容された。私たちは帰国できず、再び中国に収管されたことが不満であり、反面恐ろしかった。それは自らが中国人民に被害を与えた張本人であるからであった。管理所は医務室、理髪室、入浴場、炊事、入院の設備も完備されて、身に余る処遇だった。不満いっぱいだった私たちは、作業もせず、毎日ゴロゴロと室内で暮やマージャンの生活が続いた。

昭和二十八年春ころから、中国で犯した自己の罪悪を坦白するという、かつてない思想変革の機運が高まって

きた。毎日午前中は日本と世界事情等の学習、午後は歌、演劇、壁新聞の発行、バレーボール、バスケットボール等の体育活動が許され、私たちの手でつくられた民主委員会もできた。

昭和二十九年春には全員が自己坦白を終わり、自己の罪行を中国人民の前に暴露し、戦争に反対し平和を守る人にならなければならない態度に思想変革した。

昭和三十一年四月、中国政府の裁判により無罪判決、中国人民政府と中国共産党の寛大政策に涙を流して感謝した。同年五月、中国政府は私たちを三週間にわたって東北、山東方面の会社、学校、農村、商店等発展の状況を知らせるために旅行の処遇を受け、新中国の発展に目を見張った。

昭和三十一年七月末、中国赤十字社の招待を受け、初めてビールで乾杯を受けた。間もなく天津に集結し、五十円の金をいただき、市内の外出も許され、お土産物を買った。七月三十日、天津を後に、八月一日、十一年目にやっと懐かしい舞鶴港に上陸し、夢に見た母や妻、兄と再会することができた。

抑留記

長野県 茅野道寛

昭和十六年渡満。昭和十九年チャムスで徴兵検査。昭和二十年二月二十日現役兵として関東軍三〇六部隊へ入隊（東満東寧近くの石門子）。同四月末移動部隊となって南朝鮮馬山近くの三千浦で幕舎生活をしながら訓練とタコ壺掘り。八月ソ連軍参戦。これを迎え撃つため再び移動開始。普州駅から北上するため、糧秣弾薬を積み込み十五日朝出発の予定だった。午後重大ニュースがあるという事で出発が延期された。予想に反して敗戦の知らせ。

口惜しきで泣けた。しかし反面「これで死ななくてもよくなった」という安堵感のあったことも否定しない。時に階級は幹部候補生の座金の上等兵。でも初年兵であることには間違いない。上層部の考えていることなど全くわからなかった。夜遅くなって「我が部隊は、師団の